

Desert Wind

Vol. 63, February 2011

『約束の地をめざして』(民数記9:15-23)

LVJCC 牧師: 鶴田健次

聖書には、神の民についてのいくつかのイメージがあります。その代表的なものは、「旅する民」でしょう。神の民の最初の人となったアブラハムは、神の召しを受けて、故郷を離れ、神が示す地へ旅立ちました。またヤコブも、その生涯は旅の連続でした。そして、イエス様とその弟子たちもガリラヤからエルサレムへ旅をし、パウロもまた伝道の旅に明け暮れました。

しかし、何よりもイスラエルの民の荒野の旅こそ、彼らが「旅する民」であったことを表わすものです。エジプトで奴隷生活をしてきた彼らが、モーセに導かれてエジプトを脱出し、40年の荒野の旅を経て、約束の地に向かっていくその姿から、私たちは主の御心に導かれて歩む教会の姿を学ぶのです。

彼らは、自分が行きたい時に行き、留まりたい時に留まったのではありません。旅立つのも、留まるのも、神の言われる通りにしました。自分の都合で行動したのではなく、ただ神の命令に従ったのです。神の国への旅を私たちに与えられたのは神です。神だけが、この旅をゴールに導くことがおできになるのです。クリスチャンは、自分たちが、この神の導きの中で歩む民であることを心に刻まなければなりません。

① 幕屋に現れた神の臨在

神は、荒野を旅するイスラエルの民に、いわば移動式の神殿である幕屋を建てるように命じられました。その幕屋は神が住まれる宮であり、神がおられることを証する所として、あかしの幕屋と呼ばれました。そして、その幕屋を、神が示された通りに建てた日に、「雲」が幕屋を覆ったのです。それは神の臨在を示すもので、「シャカイナ・グローリー」と呼ばれ、イスラエルの荒野の旅が、神の確かな守りと導きのうちにあったことを示すものでした。

エジプトを出て2年目のこと、幕屋を覆った雲は、昼間だけでなく夜も火のようになって民の前にあり、片時も離れることな

く彼らの上にとどまり続けました。こうして彼らはいつでも、どこでも、はっきりと神の守りをその目で確かめることができました。神の御心に生きる者としての大前提は、主なる神が共にいて下さるということです。

② 約束の地をめざす神の民の生き方

荒野の旅の中で、イスラエルの民は、雲が幕屋を離れて上るとき、それが朝であろうと、昼であろうと、夜であろうと、前に進んで行きました。しかし、雲が幕屋の上に留まるときは、それが一週間であろうと、一ヶ月であろうと、彼らはそこに留まり、前に進みませんでした。

考えてみれば、これは大変なことです。人には、それぞれの生活があり、都合があります。そういう中で、神様の都合に自分の歩みを合わせるということは、よほどの献身がなければできません。しかし、彼らは雲の動くままに進んだのです。自分たちの都合や言い分を一切退けて、ただ神様が示されるままに歩んだのです。なぜなら、彼らには神様のなさることがすべて正しいとする信仰があったからです。そして、そんな彼らを神は確かに約束の地へと導かれたのです。

③ 共同体としての神の民の生き方

さて、神の民には様々な人がいます。生い立ち、性格、生活環境、能力、年齢、みんなバラバラです。神の民というのは、旧約以来、ずっとそうです。共通しているのは信仰だけです。ですから、信仰以外の所で結びつこうとしても、それは難しいのです。よしんば結びついたとしても、それは危うい関係です。なぜなら、私たちは気が変わるからです。また、ほんの一言、ほんの小さな出来事で、その関係は傷つきます。

そのようなことは、教会の中でも時どき起こります。しかし、教会の交わりは、そういうものによってダメになったりはしません。なぜなら、教会における交わりは信仰による交わりだからです。それは、同じ神様を信じ、礼拝する者の交わりであり、約束された神の国に向かって同じ旅をしている神の民であるということです。

DREAMS COME TRUE

- ✠ 教会堂の建設
- ✠ 敬老ホームの設立
- ✠ 幼稚園の設立

お祈りのリクエスト

- 日本の家族の救い
- 各スモールグループのオイコス伝道のために
- 入門者クラスのために福留兄、
- 英語部の働きのために
- ユースミニストリー、サンデースクールのために
- 癒しの祈り: 恵理奈ちゃん、倉田一徳さんの脳腫瘍、神崎先生の目、植木ケン兄の糖尿病、新井雅之兄の癌、中村裕二先生の直腸癌、藤永君江姉の癌、Simeon 兄の癌、スカイ君の心臓、工藤忠行兄の癌

Desert Wind では、ご意見・質問等何でも受け付けております。

lvjccdw@hotmail.co.jp

発行: 鶴田健次

編集: 松岡みどり

「私を導かれた主」

証し: キャピコ 光子

神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互いに愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちにまっとうされるのである。(ヨハネ第一の手紙4:12)

私は6人兄弟で男3人、女3人の長女として沖縄で生まれました。生家が海の近くにあり、物心がついた頃には浜辺で遊ぶのが日課でした。真夏の暑い太陽の下で、帽子もかぶらずに髪の毛が茶色になるまで泳いだり、貝を拾ったりして、自然豊かな土地で、とても楽しい幸せな子供時代を過ごしました。海で溺れる子供がいなかったのは、今思うと神様が既にこの時から守っておられ、また私を導いて下さったからだと思います。

私の祖母は、私が小学生頃にはクリスチャンで、私も祖母に連れられ何度か教会に行きました。祖母は私に聖書の有名な箇所の物語をよく話してくれました。祖母はクリスチャンの友達と定期的に集會を持ち、従兄弟にも3人のクリスチャンがいました。

1967年の夏、ハワイアンパーティーで、ハワイ出身の男性と知り合い、彼の巧みな話術と行動力に押されて、翌年の68年に、結婚しました。結婚後は二人の男の子に恵まれ、その後主人の転勤で沖縄からアメリカの三つの州を移り過ごしました。それから、イギリスのロンドンの田舎へ転勤になりました。雨の多い国で湿気があり、家族の誰か咳を始めると他の者も1週間あまりも咳き込みました。周囲は一面が麦畑で、慣れない生活がこのまま4年間も続くかと思うと気がめいりましたが、そんな生活の中での一つの楽しみは、週に一度、家族でロンドンに出て買い物をし、レストランで食事をするのでした。

私にとって、住みにくい試練の多いイギリス生活ではありましたが、そんなある日私に、二人の息子を愛し、思いやりのある子に育てるようにと強い思い

が示されました。そして私はそうさせて下さいと思わず神様の前で祈ってました。神様はクリスチャンでもない私の祈りを聞いて下さったのでしょうか。二人の息子は思春期においても何のトラブルもなく健康で素直に成長し、家族や子供達を知る人達からは、どうしたらこんないい子に育つのかと聞かれるほどに立派に育ってくれました。これも神様が子育ての知恵を私に与えて下さったからだと思っています。イギリスでの勤務は予定より早くなり、3年半で再び沖縄の地に戻ってきました。

その後、1982年に、次の勤務地であるラスベガスに引越す事になり、主人はNellis Airforce Baseで働きました。この地に引越して来たとき、息子達は上の子は高校を卒業し、下の子は中学1年生でした。それから8年後の1990年、主人はリタイアしました。しかし、その間、私たち夫婦の間には様々な理由で溝ができてしまい、子供たちも既に独立していたこともあり、思い切って主人のもとを去る決心をしました。

新しい歩みを始めた私は、しばらくして、ラスベガスに来たときから親交のあった同じ沖縄出身の栄子さんに導かれ、信仰を持つに至りました。そして1997年、イエス様を救い主として信じ、洗礼の恵みにあずかりました。そのおかげで、辛い日々の中にあっても主が私を支え導いて下さいました。

祖母が生きている時、幼い私を教会に連れて行ったり、聖書の話しをしてくれたりして、どんなにか私の救われることを願い、祈ってくれたことでしょうか。回り道をしながらも、人生の大切な節目の度に神様は私を助けて下さり、全てを良きに変えて下さいました。今は鶴田牧師のイエス様の教えを聞く日曜日の礼拝が本当に楽しみです。

神はわれらの避け所、また力である。悩める時のいと助けである。
(詩編46:1)



編集室・気まま便り

今日は私の誕生日だった。もう何十回も誕生日を迎えている。いろんな誕生日があったけど、初めて腕時計を父からもらった時のことを思い出した。中学一年の誕生日に、父は私にきれいな腕時計をプレゼントしてくれた。ちょっとおしゃれなデザインが私は自慢だった。「お父さんはこういうセンスも持っているんだ」と、新しい面の父を知って不思議な思いがした。二十歳の誕生日にダイヤのネックレスをもらった。これもセンスが良くてすごく気に入った。「お父さんは美的センスがあるんだ」と再び思ったがすぐに忘れた。今思えば、父に芸術的な何かをしてもらえば父の生き方も変わっていたかも、と思う。

天の父は無限にある引き出しから最善のものを取り出して日々私達に与えて下さっている。時に優しく、時に厳しく、時には驚きに満ちたことを私達にしてくださる。さあ、この1年もそんな天の父のお役に立てるように生きよう。